

## 使徒行伝における治癒と信仰

川崎医療福祉大学 共通科目担当

佐々木 寛 治

(平成15年11月14日受理)

Die Heilung und der Glaube in der Apg.

Kanji SASAKI

*Beaufragte mit allgemeinbildenden Fächern,  
Kawasaki Universität von Medizinischer Fürsorge  
Kuraschiki, 701-0193, Japan  
(Received on November 14, 2003)*

### 概 要

使徒行伝の二つの治癒物語 AP-X(使-3,1-10), AP-Y(使-14,8-10)ならびにヨハネ「福音書」の二つの奇跡物語 JO-X(ヨハ-5,1-13), JO-Y(ヨハ-9,1-7)を対比する。AP-YはAP-Xの、JO-YはJO-Xの止揚態である。ヨハネはJO-XをAP-Yと等しいものとしていて、これがJO-Yによって止揚されるものとみなすことによってルカ神学を批判する。AP-Yにおいてルカ神学にとっての信仰の頂点が語りだされている。この「信仰」概念に孕まれた「見えざる制度としての反ユダヤ主義」の一面を小論は指摘する。

キーワード: ヨハネ「福音書」, 使徒行伝, 治癒物語, 信仰

### Resümee

Zwei Heilungsgeschichte: AP-X(Apg-3,1-10), AP-Y(Apg-14,8-10) und zwei Wundergeschichte: JO-X(Joh-5,1-13), JO-Y(Joh-9,1-7) betrachten wir gegeneinander.

AP-Y ist eine Aufgehobenheit des AP-X, und JO-Y ist eine des JO-X. Johannes identifiziert JO-X mit AP-Y und er bestimmt dieses als vom JO-Y Aufgehobenes. Diesem Wege nach kritisiert er die Teleologie Lukas.

Sie findet im AP-Y ihren höchsten Gipfel des Glaubens. Diese unsre Arbeit kritisiert die Antisemitismus als ein ungesichtbares System, die in dem Glaubensbegriff Lukas liegt.

**Key words:** Joh. „Evangelium“, Apostelgeschichte, Heilungsgeschichte, Glaube

### はじめに

筆者は小論『ある奇跡物語の転倒——ヨハネ「福音書」9-10章における術語ラライン[III-1]——』(中国短期大学紀要第30号 1999)にて、ヨハネ「福音書」における5章と9章の奇跡物語を対照することで、重大な知見を得ることができた(一部後述)。本小論では使徒行伝3章と14章の治癒物語の間に存在する対比

を浮き上がらせることにより、ルカ神学の特質に迫るための糸口を得ようと思う。

ヨハネ「福音書」をめぐる筆者の学びの過程でいよいよ明らかになってきていることは、ルカの言語系に対するヨハネ言語系の奥深い批判である。その「批判」は、ルカのテキストに対して精密にメタモルフォースの手を加えることによってこれを転倒させる、という戦略に貫かれている（その実例のあれこれは筆者が繰り返し発表してきたところである）。この「批判」から浮かび上がるのは、筆者がルカ言語系の「見えざる制度としての反ユダヤ主義」と名づけているところのものである。

E・シュヴァイツァー先生が、(イエスにおいて神が歴史に突入する際の具体性・特殊性を、ルカが抽象的に一般化することへの批判を中心に立てて)ルカ言語を批判される諸項目も筆者は「見えざる制度としての反ユダヤ主義」の特質に算入している。また山田耕太氏は「ルカは反ユダヤ教を乗り越えて反ユダヤ主義であること」を、根拠となる文言を挙げて、つとに論じられているし、さらに、ルカ神学の反ユダヤ主義を指摘する北欧の研究者が相当数存在することも紹介されている。

現代人の言語活動にとっての「ルカ言語系の分かり易さ」が、キリスト教のユダヤ的真理性を消してきたのではないのか。この疑問に丁寧に根底から答えていくこと、そのために(キリスト教確立期に進行した)「見えざる制度としての反ユダヤ主義」の〈蓋を取ること〉。このことこそが筆者には、ホロコースト後の、しかもそれぞれの原理主義の突出してきている現在の、焦眉の課題であると思われるのである。

## 1. 対比される物語の全貌を一括して提示する

### 1.1 使徒行伝の二つの治癒物語と、ヨハネ「福音書」の二つの奇跡物語との対照

四つの物語に次のように名前をつけておこう。

行伝3,1-10を AP-X, 行伝14,8-13を AP-Y と名づけ

ヨハネ5,1-13を JO-X, ヨハネ9,1-7を JO-Y と名づけることにする。

このように名づけた上で、AP-XをJO-Xと、AP-YをJO-Yと、それぞれ対比するべくボックスに収納して次頁に掲げておいた(以下、ネストレーアーラント27版に基づき、翻訳は原則として新共同訳、必要に応じて佐々木私訳)。左と右のボックスの中で対応する項をそれぞれ◇◇などで列挙し、対応する項の中で対応する語句があればアンダーラインを付してそれを表示しておいた(アンダーラインが施されている語句相互がそれぞれ左右にどのように対応しているのか。この点についての議論はここでは割愛する。その中身を検討する作業は、すべて小論読者諸兄姉に委ねることとする)。

ルカテキストにメタモルフォースを施すヨハネの手口を分析してきた筆者からみて、右ボックスのヨハネは左ボックスを踏まえていることは確実である。なお、ここに掲げたルカの物語、ヨハネの物語の引用部分の後にはそれぞれ、前者には施術者への賛美（神の賛美につながるそれ）が、後者には施術者への糾弾（律法を破って神を冒瀆したとして）が接続しているという事実を報告しておく。重要な論点であるがここではこれには言及しない。また、JO-Yは「治癒物語の外観を装われた、上からの新しい弟子生誕物語」であることを筆者は論じてきた（上掲『ある奇跡物語の転倒』）。よってJO-XとJO-Yとを一括するのに、いまは「奇跡物語」の名を使用することにしたのである。

## AP-X(使-3,1-10)

◇<sup>使3:1</sup>ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った。

◇<sup>使3:2</sup>すると、生まれながら足の不自由な男が運ばれて来た。神殿の境内に入る人に施しを乞うため、毎日「美しい門」という神殿の門のそばに置いてもらっていたのである。<sup>使3:3</sup>彼はペトロとヨハネが境内に入ろうとするのを見て、施しをこうた。

◇<sup>使3:4</sup>ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て、

「わたしたちを見なさい」と言った。

◇<sup>使3:5</sup>その男が、何かもらえんと思つて二人を見つめてみると、

◇<sup>使3:6</sup>ペトロは言った。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」

◇<sup>使3:7</sup>そして、右手を取つて彼を立ち上がらせた。すると、たちまち、その男は足やくるぶしがしっかりして、<sup>使3:8</sup>躍り上がつて立ち、歩きだした。そして歩き回ったり躍ったりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入って行った。

## JO-X(ヨハ-5,1-13)

◇<sup>5:1</sup>その後、ユダヤ人の祭りがあつたので、イエスはエルサレムに上られた。

◇<sup>5:2</sup>エルサレムには羊の門の傍らに、ヘブライ語で「ベトザタ」と呼ばれる池があり、そこには五つの回廊があつた。<sup>5:3</sup>この回廊には、病氣の人、目の見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人などが、大勢横たわつていた。<sup>5:5</sup>さて、そこに三十八年も病氣で苦しんでいる人がいた。

◇<sup>5:6</sup>イエスは、その人が横たわっているのを見、また、もう長い間病氣であるのを知つて、

「良くなりたか」と言われた。

◇<sup>5:7</sup>病人は答えた。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです。」

◇<sup>5:8</sup>イエスは言われた。

「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。」

◇

<sup>5:9</sup>すると、その人はすぐに良くなって、床を担いで歩きだした。

## AP-Y(使-14,8-10)

◇<sup>使14:8</sup>リストラに、足の不自由な男が座つていた。生まれつき足が悪く、まだ一度も歩いたことがなかつた。

◇

<sup>使14:9</sup>この人が、パウロの話すのを聞いていた。

◇<sup>1</sup>パウロは彼を見つめ、いやされるのにふさわしい信仰があるのを認め、

◇<sup>使14:10</sup>「自分の足でまっすぐに立ちなさい」と大声で言った。

◇<sup>K</sup>すると、その人は躍り上がつて歩きだした。

## JO-Y(ヨハ-9,1-7)

◇<sup>9:1</sup>さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。

◇<sup>9:2</sup>弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」<sup>9:3</sup>イエスはお答えになつた。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。<sup>9:4</sup>わたしたちは、わたしをお遣わしになつた方の業を、まだ日のあるうちにやねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。<sup>9:5</sup>わたしは、世にいる間、世の光である。」

◇<sup>9:6</sup>こう言つてから、イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになつた。

◇<sup>9:7</sup>そして、「シロアム・・・『遣わされた者』という意味・・・の池に行つて洗いなさい」と言われた。

◇<sup>K</sup>そこで、彼は行つて洗い目が見えるようになって、帰つて来た。

## 1.2 使徒行伝の二つの治癒物語相互の対照

## AP-X (使-3,1-10)

◇<sup>L</sup>使3:1ペトロとヨハネが上って行った、神殿に、午後三時の祈りの時に。  
 使3:2すると、母の胎から足の不自由なある男が運ばれて来た。彼を彼らは置いていた、毎日、「美しい門」という神殿の門のそばに、施しを求めのために、神殿に入る人々から。  
 ◇<sup>M</sup>使3:3彼はじっと見て、ペトロとヨハネが神殿に入ろうとするところを、願っていた、施しを受けることを。  
 ◇<sup>N</sup>使3:4見つめて、ペトロはヨハネと一緒に彼を、言った、「わたしたちを見なさい」と。  
 ◇<sup>O</sup>使3:5その男は二人を注視していた、期待して、何かを二人から受けることを。  
 ◇<sup>P</sup>使3:6ペトロは言った。「わたしには金や銀はないが、わたしの持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がりなさい、そして歩きなさい。」  
 使3:7そして、捉えて、彼を右手で、立ち上がらせた、彼を。すると、たちまち、脚められて、両足やくるぶしが、  
 ◇<sup>Q</sup>使3:8踊り上がって彼は立った、歩きました。

## AP-Y (使-14,8-13)

◇<sup>L</sup>使14:8リストラに、踵足に力を失ったある男が座っていた。母の胎から足が不自由で、彼はまだ一度も歩いたことがなかった。  
 ◇<sup>M</sup>使14:9この人が聞いていた、パウロの話すのを。  
 ◇<sup>N</sup>見つめて、パウロは彼を、  
 ◇<sup>O</sup>認めて、彼が信仰を持っていることを、いやされるのにふさわしいだけの、  
 ◇<sup>P</sup>使14:10言った、大声で「立ちなさい、自分の両足でまっすぐに」と。  
 ◇<sup>Q</sup>すると、彼は躍り上がって歩きました。

◇<sup>L</sup>3.1 Πέτρος δὲ καὶ Ἰωάννης ἀνέβαινον εἰς τὸ ἱερόν ἐπὶ τὴν ὥραν τῆς προσευχῆς τὴν ἐνάτην.  
 3.2 καὶ τις ἀνὴρ χλωδὸς ἐκ κοιλίας μητρὸς αὐτοῦ ὑπάρχων ἐβαστάζετο, ὃν εἶθουσαν καθ' ἡμέραν πρὸς τὴν θύραν τοῦ ἱεροῦ τὴν λεγομένην Ὠραϊάν τοῦ αἰτεῖν ἐλεημοσύνην παρὰ τῶν εἰσπορευομένων εἰς τὸ ἱερόν.  
 ◇<sup>M</sup>3.3 ὅς ἰδὼν Πέτρον καὶ Ἰωάννην μέλλοντας εἰσεῖναι εἰς τὸ ἱερόν, ἠρώτα ἐλεημοσύνην λαβεῖν.  
 ◇<sup>N</sup>3.4 ἀτενίσας δὲ Πέτρος εἰς αὐτὸν ὃν τῆ Ἰωάννη εἶπεν, Βλέψον εἰς ἡμᾶς.  
 ◇<sup>O</sup>3.5 ὁ δὲ ἐπεῖχεν αὐτοῖς προσδοκᾶν τι παρ' αὐτῶν λαβεῖν.  
 ◇<sup>P</sup>3.6 εἶπεν δὲ Πέτρος, Ἀργύριον καὶ χρυσὸν οὐκ ὑπάρχει μοι, ὃ δὲ ἔχω τοῦτό σοι δίδωμι· ἐν τῷ ὀνόματι Ἰησοῦ Χριστοῦ τοῦ Ναζωραίου [ἔγειρε καὶ] περιπάτει.  
 3.7 καὶ πιάσας αὐτὸν τῆς δεξιᾶς χειρὸς ἤγειρεν αὐτόν· παραρρήμα δὲ εὐτερεώθησαν αἱ βάσεις αὐτοῦ καὶ τὰ σφύρα.  
 ◇<sup>Q</sup>3.8 καὶ ἐξαλλόμενος ἔστη καὶ περιπάτει.

◇<sup>L</sup>14.8 Καὶ τις ἀνὴρ αὐθαγὸς ἐν Λύστροις τοῖς ποσὶν ἐκάρητο, χλωδὸς ἐκ κοιλίας μητρὸς αὐτοῦ, ὃς οὐδέποτε περιεπάτησεν.  
 ◇<sup>M</sup>14.9 οὗτος ἤκουσεν τοῦ Παύλου λαλοῦντος·  
 ◇<sup>N</sup>ὅς ἀτενίσας αὐτῷ  
 ◇<sup>O</sup>καὶ ἰδὼν ὅτι ἔχει πίστιν τοῦ σωθῆναι,  
 ◇<sup>P</sup>14.10 εἶπεν μεγάλη φωνῇ, Ἀνάστηθι ἐπὶ τοὺς πόδας σου ὀρθός.  
 ◇<sup>Q</sup>καὶ ἤλατο καὶ περιπάτει.

左右のボックスが強い紐で結び合わされている次第は次頁にも示すが、上掲の三本の矢印で示された語句の対応も、両者の結合の深さを示している。特に、右上から右下に向かう 網掛け部分の語句 の対応は、(左右のボックスに収納された二つの物語が、足に歩く力を与える奇跡を主題にしていることに鑑みて) まことに秀逸であるというほかない。

## 2. 使徒行伝の二つの治癒物語を詳細に対比する

## 2.1 対照の基準点が確保されている

ルカの文学的手腕は、二つの治癒物語を意識的に対照させていることを読者に知らせるべく、

テキスト生産の際に、左右のボックス内の、始点 $\diamond$ 、中点 $\diamond$ 、 $\diamond$ 、終点 $\diamond$ にまったく同じ語彙を配置している。これが両者を対照する際の基準点となる。同一のものが固定されて始めて、差異は鮮やかに浮き立たされるのである。対応する項の同一語彙・語句を四角で囲んでおく。

$\diamond$ 使3:2すると、母の胎から足の不自由なある男が運ばれて来た。  
 $\diamond$ 使3:4見つめて、ペテロは  
 $\diamond$ 使3:6言ったペテロは、  
 $\diamond$ 使3:8踊り上がって彼は立った、歩き出した。

$\diamond$ 使14:8両足に力を失ったある男が座っていた。  
 母の胎から足が不自由で、  
 $\diamond$ 見つめて、パウロは彼を、  
 $\diamond$ 使14:10言った、大声で  
 $\diamond$ すると、彼は躍り上がって歩き出した。

$\diamond$ 3.1  
 3.2 και τις άνηρ χωλός εκ κοιτίας μητρός αυτού  
 $\diamond$ 3.4 άντενίσας δέ Πέτρος  
 $\diamond$ 3.6 είπεν δέ Πέτρος,  
 $\diamond$ 3.8 και εξαλλόμενος έστη και περιπατεί

$\diamond$   
 14.8 Καί τις άνηρ αδύνατος  
 έν Λύστροις τοίς ποσίν εκάθητο,  
 χωλός εκ κοιτίας μητρός αυτού,  
 $\diamond$  ός άντενίσας αυτόν  
 $\diamond$ 14.10 είπεν μεγάλη φωνή,  
 $\diamond$  και ήλατο και περιπατεί.

つまり、「母の胎から足の不自由な」「ある男が」（始点）、一方の物語 AP-X ではペテロとヨハネによって、他方の物語 AP-Y ではパウロによってなされた治癒奇跡の結果、「歩き出した」（終点）という、通有の始まりと終りが提示されているのである。二つの物語の差異は、施術者が被術者の中に何を「見つめた、アテニゾーした」か、そして前者が後者に向かって何を、またいかなる様態で「言った、レゴーした」か、による（要するに中点の内容の差異による）、という対比構造が構築されているのである。

## 2.2 中点 $\diamond$ 「レゴーした」といわれるときの、その内容・様態の差異

$\diamond$ 使3:6ペテロは言った。「わたしには金や銀はないが、わたしの持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって[立ち上がりなさい、そして]歩きなさい。」  
 使3:7そして、捉えて、彼を右手で、立ち上がらせた、彼を。  
 すると、たちまち、強められて、両足やくるぶしが、

$\diamond$ 使14:10言った、大声で  
 「立ちなさい、  
 自分の両足でまっすぐに」と。

$\diamond$ 3.6 είπεν δέ Πέτρος, 'Αργύριον και χρυσίον ουχ ύπάρχει μοι, ό δέ έχω τούτό σοι δίδωμι·έν τή όνόματι 'Ιησοϋ Χριστού του Ναζωραίου [έλειρε και] περιπατεί.  
 3.7 και πιάσας αυτόν της δεξιás χειρός ήγειρεν αυτόν· παραχρήμα δέ έστερωθήσαν αι βύσεις αυτού και τα σφυδρά,

$\diamond$ 14.10 είπεν μεγάλη φωνή,  
 'Ανάστηθι  
 επί τούς πόδας σου όρθός.

左ボックスでは、ペテロは「癒しの声」を発するが、それは「立ち上がるべきこと、」歩くべきことを促しているだけであって、ペテロは被術者を助け起こしたのである。被術者は「癒し声」を耳にしても、癒しの力がすでに自分に届いているということを知りもしないし信じてもない（要求と欲求はいかに強くとも）。助け起こされてみて始めて、自分に癒しの力が働いていることに彼は気づくのである。他方右ボックスでは、パウロの「癒し声」（それが

神癒の声であることは、メガレー・フォーネーという、ヨハネもよく使う著しい術語で示されている)は〈自分でまっすぐ立つべきこと〉を命じている、そして被術者はそれを為している。ここで進行している出来事は、いわば「信仰者の自立!」である。

### 2.3 中点 $\diamond N$ 「見つめて」といわれるときの、その内容の差異

<p><math>\diamond M</math>使3:3彼はじっと見て、ペトロとヨハネが神殿に入ろうとするところを、願っていた、施しを受けることを。</p> <p><math>\diamond N</math>使3:4見つめて、ペトロはヨハネと一緒に彼を、言った、「わたしたちを見なさい」と。</p> <p><math>\diamond</math>使3:5その男は二人を注視していた、期待して、何かを二人から受けることを。</p> <p><math>\diamond P</math>使3:6ペトロは言った。</p>	<p><math>\diamond M</math>使14:9この人が聞いていた、パウロの話すのを。</p> <p><math>\diamond N</math>見つめて、パウロは彼を、</p> <p><math>\diamond</math>認めて、彼が信仰を持っていることを、いやされるのにあざわしいだけの、</p> <p><math>\diamond P</math>使14:10言った、大声で</p>
<p><math>\diamond M</math>3.3 ὁς ἰδὼν Πέτρον καὶ Ἰωάννην μέλλοντας εἰσείταει εἰς τὸ ἱερόν, ἠρώτα ἐλεημοσύνην λαβεῖν.</p> <p><math>\diamond N</math>3.4 ἀτενίσας δὲ Πέτρος εἰς αὐτὸν ὄν τῷ Ἰωάννῃ εἶπεν, Βλέψον εἰς ἡμᾶς.</p> <p><math>\diamond</math>3.5 ὁ δὲ ἐπέειχεν αὐτοῖς προδοκῶν τι παρ' αὐτῶν λαβεῖν.</p> <p><math>\diamond P</math>3.6 εἶπεν δὲ Πέτρος,</p>	<p><math>\diamond M</math>14.9 οὗτος ἤκουσεν τοῦ Παύλου λαλοῦντος</p> <p><math>\diamond N</math>ὁς ἀτενίσας αὐτῷ</p> <p><math>\diamond</math>καὶ ἰδὼν ὅτι ἔχει πίστιν τοῦ σωθῆναι,</p> <p><math>\diamond P</math>14.10 εἶπεν μεγάλη φωνῇ,</p>

$\diamond N$ を $\diamond$ と組にして読めば、「見つめて アテニゾーして」とは、被術者のうちに「信仰」があるか否かを「確かめるために見て」という意味であることがわかる。右ボックスではその「信仰」を被術者のうちにエイドーし確認することができた( $\diamond$ )ので、パウロは「癒しの声」を発し、語った( $\diamond P$ )のである。

他方左ボックスでは、こうした「信仰」を被術者のうちに認めることができないので、ペテロは自分たちを信用し信頼してまっすぐに見つめるよう、被術者を誘う( $\diamond N$ )ことから始める。この被術者は〈信ずる者〉ではまったくなく、乞食根性を剥き出しにして、「受ける」べき何物かをペテロとヨハネに「願い」( $\diamond M$ )、「期待していた」( $\diamond$ )にすぎない(インクルシオ!)からだ。

そうすると矢印の始点と終点に立つ、エイドーの分詞イドーンへの対応は凄まじいものであることがわかる。左ボックスにある、欲求し要求するだけの乞食根性のあの被術者は、その卑しい熱っぽい視線をペテロたちにも欲しそうに差し向けたのである( $\diamond M$ )。それに対比されて、右ボックスではパウロは自分の被術者のなかに信仰が息づいていることを願いかつ喜んで霊的な救済意図の視線を彼に注いだのである。

このように見ると左右のボックスの $\diamond M$ 項は、二人の被術者の存在性格を鮮やかに対比しているものとなっていることがわかる。つまり左ボックスでは、〈自分の欲求に衝き動かされた満たされない〉男が、何物かを獲得するために使徒たちに操作的攻勢的に関わっている(よしその外観が極めて卑屈であったとしても)。他方右ボックスの、〈すでに信仰が内住している〉男は、自分を空しくして使徒の言葉に聴従しているのである。

前者は他者がその外から働きかけること（助け起こすこと◇P）によって始めて信仰に至るというレベルの魂である。

後者はそのような他者からの働きかけをもはや必要としない。信仰がその魂にすでに内住し、信仰者として自立している。このような信仰者を生み出すことを志向して、ルカの言語系はその文彩の力量を発揮しているといえよう。このようにして、ルカ神学のもとでの「信仰」は鮮明に提示された。

しかし、このような規定を受けた「信仰」を「持つ」（左ボックス◇P，右ボックス◇Q）ということは、現代人にも「分かり易い」理路ではあっても、本当にアブラハム、イサク、ヤコブの神、イエス・キリストの父なる神を信じることと適合していることなのだろうか。まさにこのことを真っ向から批判して、ヨハネ神学は名詞としての「信仰」という言葉を一切使用しない。どのような場所、どのような時にも、そこに有り、自分のうちに持っているような、神からの働きの〈今ここ〉の具体性において生きて働くのではないような、〈名詞としての信仰〉は止揚されなければならない。これがヨハネ神学が唱導して止まないところである。

### 3. ルカ「治癒物語」AP-X(使-3,1-10)、AP-Y(使-14,8-10)=JO-X(ヨハ-5,1-13)の止揚態としてのヨハネ「弟子誕生物語」JO-Y(ヨハ-9,1-7)

本小論二頁の対照表に帰ろう。

ここではAP-X(使-3,1-10)にJO-X(ヨハ-5,1-13)が対応している。ところがすでに見てきたように、AP-XはAP-Y(使-14,8-10)と項目毎に整然と対応していた（ルカ神学の立場からは、「信仰」は前者から後者へと深まっていくべきものとされている）。こうしてJO-XはAP-Yとも精密に対応しているのであって、その対応の要は、「被術者が信仰を持っているか否かの確認」◇Cであり、われわれの用語の意味での「信仰の自立」◇E、◇Fである。つまりヨハネは自らのJO-Xをルカ物語（その目標・頂点としてのAP-Y）の代理として立て、これの止揚態としてJO-Y(ヨハ-9,1-7)を記述しているのである。それはルカにおいてAP-Xの止揚態としてAP-Yが記述されていることを踏まえてのことである。

こうして、AP-YとJO-Xとが同じ地平に立っていて、これを突き抜けてJO-Yが聳えているとみなすとき、JO-Yの特質の核となるものは何であろうか。被術者に信仰があるかないかの確認がない、という点である（その裏面では、被術者に罪があるかないかが問われない、ということにもなる）。神からの治癒、新生の恵みは神の側の一方的な自由に属することであって、人間の側の信仰のあるなし・罪のあるなしとは無関係なのである（JO-Yの考察の詳細はすべて前掲拙論にゆずる）。

アブラムが背後を絶たれ、身体の衰えも終局に至り、自らを支えていた信仰も崩壊したところへ、「われは全能の神なり」と乗り出だした神。イエスを棄て信仰が解体してしまっていてガリラヤに逃げ帰ったペテロの前に、「わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った」と語りつつ立ち現われた「復活のイ

エス」。この両者はルカ神学が〈名詞の信仰〉, 〈信仰の自立〉によって明示しようとしている〈信ずる者と神との関係〉とは全く異なっていると言わざるを得ない。神を畏れる者としての異邦人キリスト教徒ルカの言語系がはらむ「見えざる制度としての反ユダヤ主義」を暴き出し, 現代のわれわれの思考態度のフレームそのものの再編再生を図る営みは, 筆者において遅々としてしか進みえていない。先達諸兄弟のご指導を切に仰ぎます。